

古代史料における貞観の地震の記録

古代史料における貞観の地震の記録

辻野匠 (Taqumi TuZino-personale familie) 辻埜匠

XI-Uduki 19

貞観の地震 (貞観の津波, 貞観の大海嘯) は

『三代實録』 卷十六 貞観十一年 (869) 五月廿六日癸未

に記録されてゐる。ここに本文を示す。なほ字體は清朝正字體で記した。本文の字體としては清朝正字體よりの書寫體であり、字形として JIS 略字風よりは清朝正字體のほうが近いと判断した。なほ、もともとの『三代實録』でどう書記されてゐたかは別の問題である。

□廿六日癸未。陸奥國地大震動。流光如晝隱映。頃之。人民叫呼。伏不能起。或屋仆壓¹死。或地裂埋殮。馬牛駭奔。或相昇²踏。城郭³倉庫。門櫓墻壁。頽落顛覆。不知其數。海口哮吼。聲似雷霆。驚濤涌潮。沂洄漲長。忽至城下。去海數十⁴百里。浩漭不辨其涯涘。原野道路。忽爲滄溟。乘船不遑。登山難及。溺死者千許。資産苗稼。殆無子遺焉。□六月丁亥朔 (次項に續く...)

同じ貞観年間に富士山も噴火してゐることは注目されるべきであらう。

底本

下記の底本を使用した。

京都大學附屬圖書館所藏 平松文庫『三代實録』 [v.08,16/60] 寛文 13 年 (1673) 刊行

URL:

『三代實録』 トップページ

<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/h007/h007cont.html>

當該箇所

<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/h007/image/08/h00710449.html>

<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/h007/image/08/h00710450.html>

¹原文では土がない。朱字で「壓」

²原文では「昇」、これは「昇」の異體字の筈だが朱字で「昇」とあるところみると校正者は誤字と見たか。「昇」は日本に多い異體字。

³原文では「郭」に土扁がつくが朱字で「郭」とある。589 年の震旦大樓炭經卷三 (P2413, 漢字字體規範 DB <http://joao-roiz.jp/HNG/>) に實例あり。

⁴原文では「千」。朱字で「十」